

積雪地帯におけるオウトウの樹形開発(1)

誌名	東北農業研究
ISSN	03886727
巻/号	50
掲載ページ	p. 141-142
発行年月	1997年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



積雪地帯におけるオウトウの樹形開発

第1報 幼木の夏季せん定時期

高橋 和博・駒林 和夫・栗田 公司

(山形県農業研究研修センター)

Development of Tree Form of Sweet Cherry Trees in Snowy Area

1. Effect of summer pruning on young trees

Kazuhiro TAKAHASHI, Kazuo KOMABAYASHI and Kouji KURITA

(Yamagata Agricultural Research and Training Center)

1 はじめに

これまで山形県におけるオウトウ栽培は、比較的積雪の少ない村山・置賜地方が中心であったが、近年、最上地方などの多雪地帯においても導入が図られている。しかし、多雪地帯では、樹の先端が雪に埋没すると主幹の途中からの折損が発生するため、定植年に最大積雪深以上の樹高を確保する必要がある。

そこで本試験では、主幹の延長枝以外の新梢を摘心する夏季せん定による樹高の確保法について検討した。

2 試験方法

試験には、1996年4月に定植した1年生苗のアオバザクラ台の‘佐藤錦’を供試した。

夏季せん定は、表1に示した時期に、主幹延長枝以外の主幹から発生した新梢を1~2cmの長さでせん除(摘心)した。また、新梢の摘心により発生した副梢は、それぞれの夏季せん定時期に基部からせん除した。

表1 試験区

試験区	夏季せん定時期
6月上旬区	6/6・7/8・8/12・9/13
7月上旬区	7/8・8/12・9/13
8月中旬区	8/12・9/13
9月中旬区	9/13
無処理区	

調査は、それぞれの夏季せん定時に幹周(接ぎ木部位の10cm上部)、全新梢長、全副梢長、全新梢葉数及び全副梢葉数を測定し、落葉時に樹高、幹周、全新梢長及び全副梢長を測定した。

3 試験結果及び考察

(1) 新梢及び副梢伸長に及ぼす影響

全新梢長は、いずれの処理区とも第1回目の夏季せん定後急激に低下したが、6月上旬区では、6月上旬に摘心した葉芽から新たな新梢が発生してきたために再度摘心する必要があった。これは、夏季せん定の開始時期が早いほど反発が大きくなるためと考えられた(図1)。

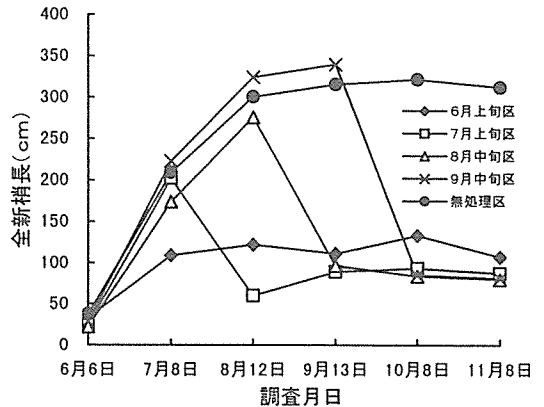


図1 全新梢長の推移に及ぼす影響

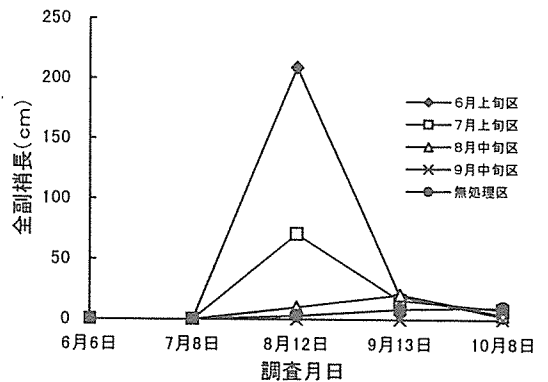


図2 全副梢長の推移に及ぼす影響

全副梢長は、6月下旬区及び7月下旬区で長くなったが、8月中旬区、9月中旬区及び無処理区では副梢の発生が少なかった(図2)。

(2) 葉数に及ぼす影響

新梢葉数は、6月下旬区で第1回目のせん定後に新梢伸長が旺盛になったため葉数が増加したが、その他の処理区ではせん定後に減少し、最終的には無処理区が最も多くなった(図3)。

副梢葉数は、副梢の発生が少なかった9月中旬区及び無処理区で少なく推移し、せん定開始時期が早くなるほど生

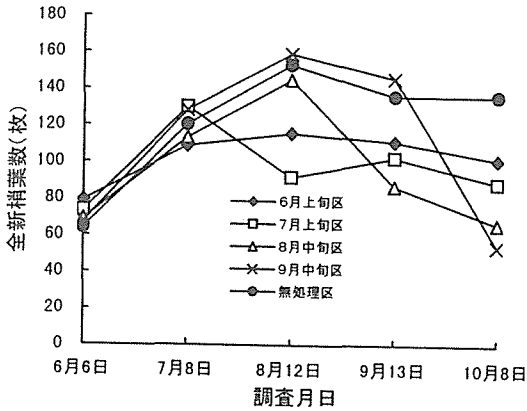


図3 新梢の全葉数の推移に及ぼす影響

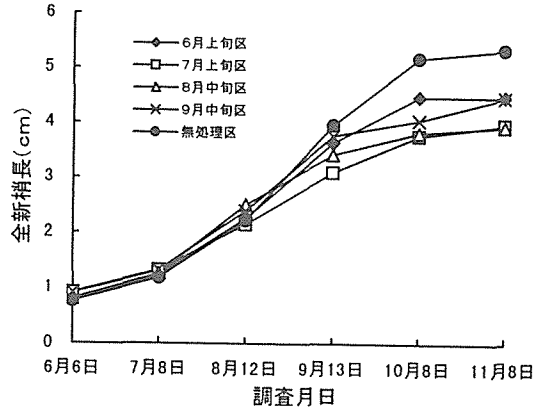


図5 幹周の推移に及ぼす影響

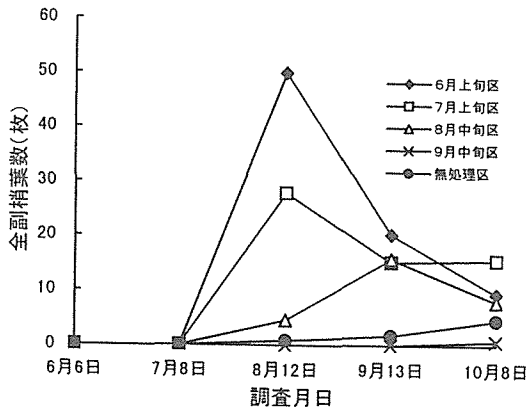


図4 副梢の全葉数の推移に及ぼす影響

育期の葉数が多く推移した(図4)。

(3) 幹肥大に及ぼす影響

幹周は、いずれの区とも9月中旬頃までに順調に大きくなったが、夏季せん定区で9月中旬以降は幹の肥大が緩慢になった。これは、夏季せん定により葉数が減少したためと考えられた(図5)。

(4) 落葉時の樹体生育に及ぼす影響

樹高は、夏季せん定の時期が早い6月上旬区が最も高く、夏季せん定の開始時期が遅くなるにつれて低くなる傾向があった。幹周は無処理区が最も大きく、全新梢長及び全副

表2 落葉時の樹体生育に及ぼす影響

処理区	樹高幹周 (cm)	全新梢長 (cm)	全副梢長 (cm)	
6月上旬区	214	4.5	107.0	2.7
7月上旬区	168	4.0	87.1	8.4
8月上旬区	196	3.9	79.7	3.7
9月上旬区	137	4.5	81.0	0.3
無処理区	146	5.3	312.0	9.9

梢長は無処理区で明らかに長くなった(表2)。

4 まとめ

早期(6月上旬)から夏季せん定を実施することにより、主幹延長の新梢伸長を促進し、目標樹高を早期に確保することが可能になると考えられた。しかし、夏季せん定の開始時期が早くなると夏季せん定の反動が大きく、副梢の発生が多くなるため、随時副梢をせん除する必要があると考えられた。

また、一般的に夏季せん定は樹勢を抑制させる効果が知られているが、本試験においても夏季せん定により、幹の肥大が抑制されたことから、樹勢の抑制効果が確認された。なお、樹勢を抑制することを目的とする場合は、夏季せん定の時期を8月以降と遅くすることにより、新梢の再伸長や副梢の発生を抑制でき、容易に樹勢コントロールが可能になると推察された。